

伯耆国分尼寺跡の調査

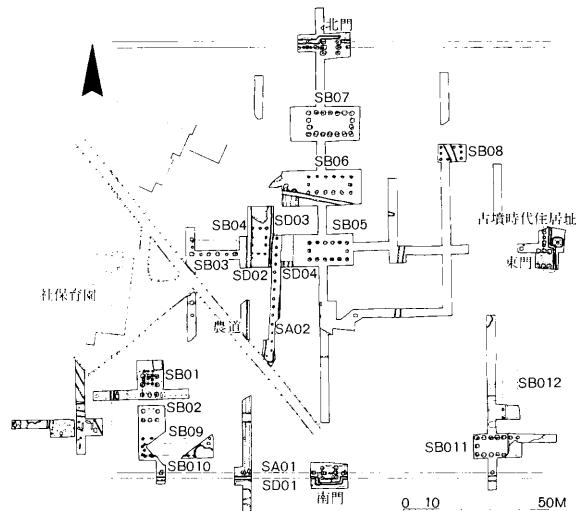
平城宮発掘調査部

伯耆国分尼寺跡の発掘調査は、昭和48年10月2日から同年12月5日の間、一昨年度（昭和46年度調査）に続く第2次調査として、倉吉市教育委員会が実施したものである。佐藤、岡本、上野が参加した。第1次調査で、すでに一辺150m四方の寺域を限るとみられる柵列と周濠の一部、これに開く東門と南門、内部の建物4棟が明らかになっている。今回の調査は、主として内部の建物群とその配置関係の確認に重点をおき、併せて外郭施設の追認調査をおこなった。発掘面積は約3,000m²である。

調査の結果、新たに検出した遺構は、建物9棟、北門、四至を画する周濠および柵列、その他の溝、柵列などである。建物は第1次調査と合わせて12棟になりすべて掘立柱であり、礎石建物は皆無である。南北中心線上の北半部に位置する3棟の東西棟（SB05・SB06・SB07）が中心建物となり、前面は広場的空間となる。東南隅と西南隅にはL字形に対称的に建物（SB02・SB09、SB011・SB012）を配置する。時期は建物の切合い関係から3期に細分でき、最も整備されるのはⅡ期である。

今回の調査をもって、ほぼ主要部分が明らかになったが、建物の構造や配置からみて、通常の寺院の伽藍配置と様相を異にしており、むしろ最近各地の発掘例にみられる地方官衙遺跡に通ずる側面も考えられる。あらためて、本遺跡の性格を再検討する必要性が生じた。

なお以上の調査とは別に、国分寺西方500m程に位置する国庁裏神社北側の地域の予備調査をおこなった。すでに道路切り通し法面に柱穴と溝状遺構が発見されており、また遺物も広い範囲に分布することから、奈良時代の大規模な遺跡が推定されていた。



第1図 伯耆国分尼寺遺構図

調査の結果、法面にみられた柱穴列は三棟以上の建物からなり、東西と南北に走る溝で区画されていることが判明した。またこの溝に囲まれた内方に礎石根石列（13間分）を検出した。円面鏡や墨書き土器が出土しており、建物遺構とともに官衙関係の重要な遺跡と考えられる。

（岡本東三）

倉吉市教育委員会『伯耆国分尼寺跡発掘調査概報』1974参照